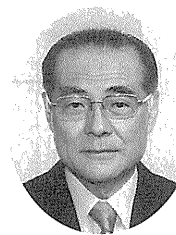


ずいそう

## 浜名湖の黒鯛釣り

星 修



一時間、幸せになりたかったら 酒を飲みなさい。  
 三日間、幸せになりたかったら 結婚しなさい。  
 八日間、幸せになりたかったら 豚を殺して食べなさい。

永遠に、幸せになりたかったら 釣を覚えなさい。

(開高 健著：「オーパー中国古諺一」(集英社))

この諺にあるように、釣りを覚えたから永遠に幸せになれたとはとても思えない。しかし、釣れたら一時的に幸せを感じることは多い。

友人の釣り師から誘われて、浜名湖の黒鯛釣りを始めて30年になる。最初の釣行で、その釣り師をさしおいて、黒鯛を釣り上げてしまい、この釣りの虜になってしまった。

黒鯛は、人間の生活圏に最も近い突堤や岸壁でも釣れ、釣り味よし、食べてよしで、私を始め多くの釣り人を魅了させてくれる。

釣り場は、湖と遠州灘が接する通称今切口と呼ばれる、狭くなった水路の突堤である。

夜の帳がおりる頃、潮の流れが徐々に緩みはじめ、昼間の餌取りが退場し、いよいよ本命の黒鯛を狙えるゴールデンタイムを迎える。7mの長竿に餌のオキアミやジャムシを付け、暗闇の海面に放り込む。仕掛けはどこへ沈んだか分からないが、好ポイントへ入ったと信じ、道糸を張り、ひたすらアタリを待つ。

しばらくすると、「コツンコツン」とした前アタリの微震が道糸に伝わってくる。合わせるタイミングを計る。「グイ」と竿先が水中に引き込まれた。「いまだ」大きく竿を煽ると、ズッシリとした重量感だ。何回かの魚の締め込みに、「黒鯛だ」と確信する。タモに無事収め、突堤に引き上げた。その大きさと、いぶし銀で精悍な顔つきに思わず「ヤッター、バンザイ」と叫びたくなる。この感激を味わいたく、黒鯛釣りを続けているといっても過言ではない。

大海原でのんびり釣り糸を垂れていれば、心が癒されるという。釣れなくとも、この心境で一日釣りを楽しめればよいのだが、どうしても欲がからみ、黒鯛の顔を見なければ帰れないと、餌を変えたり、釣り場所を移動したり、あれこれと試みしてみる。私の短気な性格が丸出しになってしまう。だが、この性格が時とし

て、思わぬ釣果をもたらすことがあり、この釣りは、私にとってまさにうってつけである。

時には、思わぬハプニングが起こるものである。同僚との釣行時、釣り上げた黒鯛を手の平で採寸し、「50cm近くはあるな。新記録だ」と祝福しあっていた。そこへ、たまたま取材に訪れた地元の新聞記者と名乗る人から、「写真を撮らせてください。11月としては珍しい大物」といわれポーズをとった。送られてきた新聞記事には、写真付きで「名古屋の星さん、47cmの大物」とあり、早速、家族・同僚などに見せびらかせ、大いに自慢したものである。

突堤の前面にある、テトラポッドに乗っての釣りは、黒鯛が数多く釣れていた。私は以前、釣り人がテトラポッドから落下するのを目撃したので、この釣りは御法度としていた。しかし、全く釣れない日が続き、今日は何とか成果を挙げたいと意を決し、テトラポッドに乗った。暫らくすると、狙い通りアタリがあり、黒鯛が掛かった。テトラポッド上の狭い足場での魚とのやり取りに、つい足元がおろそかになり、滑り落ちてしまった。「しまった」と思ったが、もはやどうしようもない。胸まで水に漬かり、手足を擦りむき、血を滲ませながら、悪戦苦闘して、何とか這い上がり、ことなきを得た。そんな時でも、何とか釣竿はしっかりと握ったまま無傷で、黒鯛も無事取り込んだ。我ながらに感心したが、近くの釣り客からも「さすが」との声が飛んだ。どうしても釣りたいとの根性が、そうさせたのかもしれない。これに懲りて以後テトラポッドの釣りは自重している。

最近、この釣り場所は、突堤やテトラポッドの沈下で潮流の変化が著しく、釣り荒れもあって釣果はかンばしくないようだ。釣り客も大幅に減少し、寂しい釣り場となった。一時期、隣の釣り客の肘が当たるほどの盛況であった頃と比べ、隔世の感がする。もう一度、その頃の賑わいを取り戻すことができるよう願しながら、今年も浜名湖へ釣行している。

——ほし おさむ 株式会社荏原倉ハイドロテック中部支店支店長——